

「報告」

平成15年度第2回「総合的な学習の時間」における地学領域指導者講習会 「阿蘇火山中央火口丘とその周辺の地質学習会」

田口 清行*

標記の講習会が平成15年10月25・26日(土・日)に、熊本大学の渡辺一徳先生と森林総合研究所の宮縁育夫先生の案内で行われた。参加者は県外者を含め25名であった。

今回の講習会の目的は、阿蘇火山中央火口丘を中心に巡検しながら、阿蘇火山の成り立ちを知り、阿蘇地方の人々と火山の共生について学ぶことであった。

第一日目

①立野火口瀬。南阿蘇大橋より西側を眺め、阿蘇カルデラ唯一の切れ目である立野火口瀬とそれをふさぎカルデラ湖の形成に関与した立野溶岩や赤瀬溶岩の崖を遠望し、観察した。立野溶岩の見事な柱状節理についても眺め、その成因についての説明を聞いた。また、この火口瀬は大分ー熊本構造線にともなう断層の影響を受けているということであった。

②鮎埴ノ滝。栃木の小山旅館横の展望所より、玄武岩の鮎埴ノ滝溶岩にかかる滝を眺めた。この鮎埴ノ滝溶岩は二枚の溶岩流がみられる。またこれらの溶岩は中央火口丘群の噴出物の一部であるといわれているがその噴出源は不明である。

③米塚・上米塚。まず阿蘇の風景写真で多く取り上げられる美しい米塚を眺めながら、スコリア丘とその付け根付近から溶岩流があったことを聞いた。その後、上米塚に移動し、道路の設置に伴い削り取られたスコリア丘内部を近づいて観察した。ゆっくり冷却し赤く酸化したスコリアが観察できた。

④草千里ヶ浜火口。火山博物館周辺で昼食をとったあと、草千里ヶ浜を横切り、烏帽子岳の北麓を覆う草千里ヶ浜火山の噴出物を観察した。赤褐色と黒色の縞状の溶結火砕岩を見ることができた。また、ここからの噴出

* 熊本市立江原中学校教諭

によってできた草千里ヶ浜降下軽石層はそのオレンジ色が特徴的で鍵層となっている。年代はおよそ3万年前である。



草千里ヶ浜火口の噴出物の観察風景

⑤中岳火口と火口周辺の堆積物。中岳は当日、午前中は立ち入り禁止規制中であつたが、午後になり回復し、火口の見学と砂千里周辺の中岳の噴火活動に伴う堆積物を観察した。火口の湯だまりはかなり減少している様子が噴気の隙間から垣間見れた。

⑥池の窪タフリング。夜峰山北東部の池の窪火口にあるドーナツ状の火砕丘が池の窪タフリングである。放牧中で近づけないのが残念であつた。その後、宿に向かいその夜は、参加者一同交流を深めた。

第二日目

⑦青年の家入りの火山灰層。ここでは、中央火口丘群の噴出物（とくに中岳の噴出物がほとんどである）についての見方の説明があつた。とくに、クロボク土層とよばれる黒い地層が挟まり、この成因については植生の影響を受け、火山活動の休止期または静穏期であらうという説明を聞いた。

⑧仙酔峡（高岳、鷲ヶ峰）。ここでは、高岳、鷲ヶ峰を遠望する予定であつたが、雲が厚く全容を見ることができなかつた。天気がよければ、成層火山である鷲ヶ峰火山の噴出物の上に高岳の噴出物であるアグルーチネートを観察することができる。

⑨中道の火山灰層。ここでは、前述の⑦青

年の家入りの火山灰層と対比できるものを見ることができる。また、噴出源である中岳から距離が遠くなるため、層厚が小さくなることが理解できる。



中道の火山灰層観察

⑩一の宮グリーンロード沿いの阿蘇火砕流堆積物。ここは以前、地学会巡検でもまわったところであり、阿蘇-1、阿蘇-2、阿蘇-3、阿蘇-4の各火砕流堆積物が見ることができる場所である。その後、帰路についた。

今回の講習会の目的のひとつである、阿蘇火山の成り立ちを考えるという点では、カルデラ生成の要因となった阿蘇火砕流に伴う堆積物の観察や立野火口瀬の見学、そして、中央火口丘群のいくつかを巡りながらその成因や岩石の観察などとても有意義なものであつた。

最後に、この講習会において終始丁寧にご案内・ご指導いただいた渡辺一徳先生、宮縁育夫先生に深く感謝の意を表し、講習会報告とする。なお、今回の講習会の内容をさらに深くご理解いただくためには、講習会当日にも活用された「一の宮町史・自然と文化阿蘇選書7-阿蘇火山の生い立ち-地質が語る大地の鼓動-（渡辺一徳先生著）」（第2版）をお読みください。